

より進化したジーニアスの語法記述 ——改訂の3つの柱を実例で見る



柏野健次

私は『ジーニアス英和辞典 第4版』(G4)の語法欄の改訂に着手した際に、方針として「記述をより正確に」「説明を分かりやすく」「新しい情報を付け加える」という3つの柱を立てた。

本稿では、それぞれの具体例を1つずつ挙げ、どのような経緯を経てG4の記述がG5のように変わったのかを解説していきたい。

I 記述をより正確にした例：please

G4ではpleaseの語法欄(p. 1474)に次のように書かれている。

語法 pleaseは一般にていねいさを示すために添える語であるが、相手に利益になると思われる場合や単なる指示表現では付けないことが多い：Have another cup of coffee. コーヒーをもう一杯どうぞ / Sign here. [署名欄の指示表現で]ここに署名してください。

これは以下の点で不十分だと考えた。

① pleaseを使うとどの程度ていねいになるのかに触れられていない。② pleaseの位置についての言及が十分ではない。③ 話し手利益と聞き手利益の区別が明確ではない。

こういう理由からG5(p. 1604)では以下のように変更した。

語法 (1) [pleaseとていねいさ] pleaseは最小のていねいさしか示さない語であるため、「命令」を表す文にpleaseを付けても「依頼」にはならない。Tell me about it.に比べ、Tell me

about it, please. は言い方がソフトになっているだけで、「命令」であることに変わりはない。

(2) [文中の位置] 一般に、文頭では心のこもった言い方となり、文末では形式的な言い方となる：Please make a donation to save endangered animals. 絶滅寸前の動物を守るために寄付をお願いします / Come in, please. 中へどうぞ《◆患者を診察室に案内する場合など》。

(3) [話し手・聞き手の利益] pleaseは一般に話し手が利益を受ける場合に用いられるが、聞き手の利益になる場合も、話し手が心をこめて相手に行動を促す時にはpleaseを文頭で使うことができる：Please be careful. 気をつけて / Please make yourself at home. どうぞ、お楽にしてください。ただし、「指示」や「忠告」を表す場合は用いられない：×Please sign here. 《◆署名欄の指示表現で》 / ×Please take an aspirin for your headache.

なお、G5では触れなかったが、pleaseはこのほか以下のような特徴を持つ。

一般に、目下の者や立場上断れない人に使う。

(ア) “Please watch your language,” his mother warned. (「言葉遣いに気を付けなさい」と彼の母親はたしなめた) —G. Gipe, *Back to the Future*

(イ) “Please tell the court what happened next,” said Pearson. 「次に何が起こったのかを証言してください」とピアソンは言った) —J. Archer, *The Prisoner of Birth*

不特定多数の人に対するアナウンスメントとしてもよく用いられる。

- (ウ) “Please stay away from the edge of the cliff.” (岸壁に近づかないでください) — ネイティブ・スピーカー提供

II 記述を分かりやすくした例：can

G4ではcan (語義④) の語法欄 (p. 288) の一部に次のような記述が見られる。

語法 The harbor can [may] be blocked. その港は封鎖されうる《◆canでは、現実には封鎖されるか否かは別として理論上は封鎖可能であるという意；mayでは、理論上の事よりも、現実には封鎖されるかもしれないし、されないかもしれない、それは状況次第だ、の意》。

この「理論的可能性」「現実的可能性」という考え方は、G. Leechの *Meaning and the English Verb* (1971, Longman) に由来するものであるが、どうも分かりにくい。

そこで私は拙著『英語助動詞の語法』(2002年、研究社) に基づいて前者を「一般的可能性」、後者を「特定的可能性」と読み替えて以下のように修正した。

語法 [可能性を表す can と may] (1) 肯定文ではcanは多くの場合、一般的可能性(出来事が不定期に何回か起こる可能性)を表すのに対して、mayは特定的な可能性(出来事が特定の1回だけ起こる可能性)を表す：The monsoon *can* be dangerous, so it is better not to go to sea in that season. (一般に) モンスーンは危険なことがあるのでそのシーズンには出港しない方がいい / The monsoon *may* be dangerous, so it would be better to begin the expedition after the monsoon is over. (今回の) モンスーンは危険かもしれないので雨が上ってから遠征を始めた方がいいだろう。

したがって、G4の例文は、canでは「その港は封鎖されることがある」の意を、mayでは「その港はいま[これから]封鎖されている[される]かもしれない」の意を表すことになる。

III 新しい情報を付け加えた例：if

G4のifの項(語義①)には、「if節が仮定法過去完了で主節が仮定法過去」という形式の混合型仮定法の例が挙げられている。

If I had caught that plane, I would be dead now. もしその飛行機に乗っていたら今ごろは死んでいるだろう

この例はそのままG5に引き継いだが、混合型仮定法にはもう1つ、「if節が仮定法過去完了(動詞は状態動詞)、主節が仮定法過去」の形式で「『過去も含めて現在も…でない』ことを述べる」タイプがある[cf. 拙著『英語語法詳解』(2012年、三省堂)]。このタイプの仮定法は、(ウ)のAzar and Hagen, *Understand and Using English Grammar* (2009, Pearson / Longman) をはじめ多くの英米の学習英文法書でも取り上げられているくらい一般的なものである。

- (ウ) *If he were a good student, he would have studied for the test yesterday.* 彼がまじめな学生だったら、昨日テスト勉強をしたらだろう。

こういう理由から、G5では新情報として以下の例と説明を付け加えることにした。

His grandmother died fifteen years ago. If he were a surgeon, he might have saved her life. 彼の祖母は15年前に死んだ。もし彼が外科医だったら命を救っていたかもしれない《◆彼は過去も今も外科医ではない。If he had been a surgeon, ... では現在のことには触れていないので「彼は現在外科医である」という可能性も生じる》

(かしの けんじ・大阪樟蔭女子大学名誉教授)